

# 質的研究の理論的背景

## Philosophical Background of Qualitative Research

時津倫子

Tomoko TOKITSU

### キーワード

質的研究、社会構築主義、社会構成主義、ポスト実証主義  
qualitative research, social constructionism, postpositivism

**Abstract:** This paper aims at exploring the different philosophical ideas that influence qualitative researches in social sciences. Many of the recent qualitative researchers refer to some philosophers' name, from Aristotle to Foucault to discuss their findings utilizing some philosophical terms and ideas. Knowing those philosophers' thought becomes much more necessary to read and write qualitative research papers.

Chronologically and geographically arranged matrix of philosophers and their perspectives of existence and methods for understanding phenomena is displayed. Compared to quantitative research, qualitative research has much wider philosophical background. It seems that quantitative researchers have no need to think about Aristotle's kinds of knowledge, Foucault's power/knowledge and so on. Evolutionism about science behind the quantitative researches might make the researchers think that they occupy the highest position in the social science. Qualitative researchers seemed to challenge them by insisting that their origin of thought could be traced back to great ancient Greek thought, which appeared far earlier than the origin of quantitative researches, and by using ideas of famous philosophers in our time who appeared far later than positivists. This paper concludes that qualitative or quantitative is not the problem, and that it is important to choose more adequate method for purpose of the researches.

## 1. はじめに

質的研究の入門書や解説書を紐解くと、演繹、帰納、主観、認識論、实在論、解釈学、構造主義など、哲学辞典を引きたくなるような用語が並ぶ。5版を重ねる質的研究ハンドブック (Denzin&Lincoln, 2017) には、数々の研究手法に先立って、質的研究の理論についての章が設けられているし、Oxford handbook of qualitative research (2014) でも同様である。前者においては実証主義、ポスト実証主義、構築(構成)主義、批判理論が1章にまとめて紹介されたあと、フェミニズムやポストコロニアリズム、カルチュラルスタディーズやクイア理論など、質的研究に関連が深いテーマを扱う各分野が1章ずつを割いて紹介されている。後者では、Philosophical approaches to qualitative methodとして、ポスト実証主義、社会構築(構成)主義、批判理論、フェミニズム、クイア理論についてそれぞれ述べられている。理論的な立場と、主に扱われるテーマ(ジェンダーや文化)についての言説が並列しており、混乱ぶりがうかがえる。

ブラサド/箕浦(2018)は、質的研究に関わる理論をポスト実証主義として位置づけ、その「技」の伝統として、解釈学やシンボリック相互作用論、ドラマツルギー、ドラマティズム、エスノメソドロロジー、エスノグラフィーを解釈的アプローチ、記号論と構造主義を深層構造に注目するアプローチ(構造主義)、史的唯物論、批判理論、フェミニズム、構造化と実践の理論を批判的アプローチ、ポストモダニズム、ポスト構造主義、ポストコロニアリズムをポストがつく諸学派と、4種に大別して整理している。網羅的に述べられているが、理論的な立場と具体的な方法論を区別せずに扱っているところがあり、個々の立場については簡易にまとめられているが、全体の流れが見えにくくなっている。また、解釈学的アプローチの系譜図にのみ、「イマヌエル・カントの思想の継承」というタイトルが付されているが、本文中にはその説明がない。

Brinkmann(2018)では、質的研究の哲学として、プラトンやアリストテレスのギリシャ哲学から、デカルト、ロック、ニーチェなど19世紀までの流れと、その後のイギリス経験論から実証主義、ドイツの現象学と解釈学、フランスの構造主義とポスト構造主義の順に、主たる人物を排した国と年代によって分類し、フェミニズムや土着の哲学(indigenous philosophy)を西洋哲学史へのカウンターとして位置づけている。

このように、質的研究の背景となっている理論についての整理は、著者の考えによってさまざまである。解釈学や現象学、構造主義やポスト構造主義が、質的研究の背景にあるとする点では共通しているし、フェミニズムや西洋以外の文化圏での研究において質的研究法が多く利用されてきたことにも共通性がある。また、どの著作においても、実証主義を質的研究に相反する、理論的に異なる流派として扱っている。実証主義に根を張った数量をデータとする研究者からの質的研究への批判に対抗すべく、ポスト実証主義に連なる偉人たちの功績にあやかりようとしているようにも見える。

本稿では、質的研究の立場を数量的研究とは違う哲学的背景をもつものとして説明する際に度々引き合いに出されるアリストテレスから、現象学、社会構築(構成)主義に至るさまざまな理論の流れを実証主義に連なるものも含め、時系列順に整理することを試みる。科学(science)の原義をふりかえってみれば「知ること」である。何を知ることか。どのようにして知ることか。先達たちはどのように考え、論じてきたのか。まずは科学、「知ること」についてのさまざまな考え方を、時系列順に整理することから始めよう。

## 2. アリストテレスの知

アリストテレス (B. C. 384-B. C. 322) はその息子ニコマコスによって編集された『ニコマコス倫理学』の第 6 巻において、「知的な卓越性 (アレテー)」をもたらすものとして、技術 (テクネー)、学 (エピステーメー)、知慮 (フロネーシス)、智慧 (ソフィア)、直知 (ヌース) をあげている。「ことわりを有する魂」には認識的部分と勘考的部分がある。認識的部分は智慧 (フィリア) であり、智慧にテオリア (観照的生活) を加えたものに、直知 (ヌース：基本命題) と学 (エピステーメー：論証可能な状態) が含まれるとする。勘考的部分とは、思量が可能な、人間的ないろいろな事柄であり、これには知慮 (フロネーシス) と技術 (テクネー) が含まれる。

つまり、アリストテレスが「ことわりを有する魂」と呼んだものを「知識」と読み替えるなら、知識には論証すべき命題と、日常生活の実践や制作に関わる諸々の情報の 2 種類があるということになる。

プラサド／箕浦 (2018) においては、エピステーメーを実証主義に対応するものとしており、質的研究によって得られる知識は技術 (テクネー) によるものであると考えている。一方、Brinkmann (2018) では、テオリアを理論的知識 *theoretical knowledge* と解釈し、それに付随する価値 (徳) としてエピステーメーを位置づけ、それによって可能な質的研究として、古典的な現象学的研究をあげている。同じ語であるのに含意が異なる。

いずれも、質的研究につながる考え方として、アリストテレスの文言を利用してはいるが、十分に吟味した上での解釈であるかどうかについては疑問が残る。アリストテレスには『オルガノン』と題された著作があり、これは「道具」「機関」という意味である。アリストテレスの哲学を質的研究の背景とするのであれば、参照すべき著作であろう。「知的な卓越性 (アレテー)」を科学的知識として読み替えるのが適切であるかどうかについても検討が必要である。

## 3. 17世紀から18世紀：ベーコン・デカルト・ロック・カント

17 世紀はイギリスの歴史学者バナーフィールドが、その著『近代科学の誕生』(1949) において「17 世紀科学革命」と呼んだ時代である。錬金術やアリストテレスが提唱した観照 (テオリア) による自然観察や、物体はそれぞれの目的に従って運動するという目的論的な自然観が、ガリレオやニュートン、ケプラーの出現によって否定されることになった。追試可能な実験や観察の方法が科学の方法として普及したのもこの頃である。その頃のイギリスにはフランシス・ベーコンとジョン・ロック、フランスにはルネ・デカルトがいた。

フランシス・ベーコン (1561-1626) は、1620 年に『ノヴムオルガヌム』(新機関) を著した。これはアリストテレスの『オルガノン』にとってかわる「新オルガノン」の意味合いを付加する意図でつけられたタイトルであった。「知は力なり」という有名な文言を残したベーコンは、知識を得る方法としてそれまでとは異なる「帰納法」を提唱した。ベーコンは、人間が生きている上で日々さらされ、慣らされている先入観のことを「イドラ」<sup>1</sup> と呼んだ。とくに、現存する学問的理論、仮説演繹による理論構成について「劇場のイドラ」と呼び、これを排して赤子のような心で「イデア」<sup>2</sup> に至る方法として、新しい帰納法を考えた。

ベーコンが「劇場のイドラ」として退けた、仮説演繹による理論構成とは古典的な三段論法をさす。「すべての人間は死ぬ。ソクラテスは人間である。よってソクラテスは死ぬ。」という有名な例がある。三段論法では、前提となる命題の内容が正しいこと、それに続く命題が、前提とな

る命題が言及する集合の部分になっていることが要求される。この条件が満たされなくても形式的には成り立つのだが、このような場合は「詭弁」という評価に甘んじることになる。また、ベーコン以前の帰納法は単純枚挙による一般化であり、たとえば「ソクラテスは死んだ、プラトンは死んだ、アレクサンダーは死んだ、ソフォクレスは死んだ、よって人間は死ぬ」というような論法が考えられる。

それに対してベーコンが提唱した新しい帰納法は、ある性質についてそれが不在である場合、程度が異なる場合と比較検討して、それが起こる偶然的な要素を除去するという手続きをふむ。実験計画における変数の統制と同じようなアイデアである。蓋然的推理の嚆矢と評されるところであるが、蓋然性 probability は確率とも訳されており、当時の数式中心の理論構成にもなじみがよく、19世紀に発する実証主義の下地を作ったともいえる。

ルネ・デカルト (1596-1650) が『方法序説』を著したのは 1637 年、その 4 年後の 1641 年には『省察 (第一哲学についての省察)』を出版した。これらの著作の中で述べられたのが「我思う故に我あり」の文言である。デカルトは、自然科学にも形而上学にも共通する方法として、1) 明晰判明 (速断、偏見を避け、疑いようのない事実のみを受け容れる)、2) 分析 (問題を分割して考える)、3) 総合 (単純なことから複雑なことへの順序に従う)、4) 枚挙 (見落としがないように注意深く見直す) という、四つの規則を同定した。どんなに疑っても、疑っている「我」が今「ある」ということは疑いようのない事実である。「我思う故に我あり」は、明晰に判明できる命題の例として述べられている。明晰に判明した命題からはじめて、論証したい問題を分割し、総合し、枚挙するという一連のプロセスは、ギリシャ時代から綿々と受け継がれた演繹法による証明に、詭弁を招かないくふうを加えたものと考えることができる。このデカルトの四つの規則は、のちにライプニッツやニュートンへと受け継がれ、微分積分学や幾何学といった数学理論の発展にも一役買うことになる。人は生まれつき明晰に判断するための観念 (アイデア) を与えられていると考えることになり、それが大陸合理論<sup>3</sup>と称されるゆえんである。

ジョン・ロック (1632-1704) はこのデカルトの『方法序説』を学び、デカルトが「明晰判明な事実」と呼んだ知識は、人の感覚と内省の経験から得られると考えた。その著『人間知性論』(1689) においてはこのことを、「タブラ・ラサ (白紙、拭われた石板)」と比喩的に表している。白紙に文字を書き込んでいくように、経験によって心に知識が書き込まれていくといった意味合いである。デカルトにとって感覚は判断に誤謬をもたらし、明晰な判明を妨げるものであったが、ロックは感覚によってこそ経験が得られ、知識がもたらされると考える。どのようにして知識が成立したか、ということを知る方法としては、個々人の内省と記述によるしかないということになる。デカルト以降のヨーロッパ大陸での合理論に対し、ロックを代表とするこの考えは、イギリス経験論と称された。

デカルトを中心とした大陸合理論、ロックを中心としたイギリス経験論は、ライプニッツを経由して、18世紀の哲学の巨匠、イマヌエル・カント (1724-1804) に伝えられた。カントが『純粋理性批判』を出版したのは 1781 年のことである。デカルトの方法序説からおおよそ 150 年、ロックの人間知性論からは約 100 年後である。この書においてカントは、イギリス経験論と大陸合理論を総合することに成功している。カントは直観 (感性) と思惟 (悟性) を認識の二大要素とし、これらが総合されることによって「コペルニクスの転回」<sup>4</sup> が起こり、経験だけでも観念だけでもない、総合判断が可能になると考えた。「内容なき思考は空虚、概念なき直観は盲目」とカントは述べている。内容は「純粋直観」(時間と空間) を通じて、つまり経験によって与えられる。思考するにはその時すでに「純粋悟性概念」(カテゴリー) をもっている必要がある。経験に

よって得た直観と、すでに頭の中にある概念(カテゴリー)を「コペルニクスの転回」(180度異なる方向から考える)によって総合することが、「アприオリな(先天的な)総合判断」としての知識を得る方法である。カントは、直観(経験)できない対象については知ることができないとし、その例として神と世界と魂をあげる。神の存在、世界の果て、魂の不死。「神様はいる」(定立)に対して「神様はいない」(反定立)という命題がある時、このような問題の解決としては、1)「定立」を選び「反定立」を斥ける、2)「反定立」を選び「定立」を斥ける、3)「定立」「反定立」のどちらも斥け、第三の命題を求める、4)「定立」「反定立」どちらも承認し、それぞれについて承認できる領域を明確にするという4通りの方法がある。カントは、実践的立場からは1)の定立を選ぶことになる」と述べている。

#### 4. 19世紀から20世紀：プラグマティズム、現象学、進化論、論理実証主義

カントの『純粹理性批判』を熟読したチャールズ・サンダース・パース(1839-1914)はカントのいう *pragmatisch* (実用的) から自身の立場をプラグマティズムと命名し、ヘーゲル(1770-1831)はカントのカテゴリー論を継承して、フッサール(1859-1938)の現象学へと続くドイツ観念論を完成させた。ヘーゲルの弁証法を継承したカール・マルクス(1818-1867)からアドルノ、ホルクハイマー、ハーバマス等を擁するフランクフルト学派への流れは批判理論へと続き、フッサールの現象学はハイデガー、ガダマーの解釈学、アルフレート・シュッツ(1899-1959)の現象学的社会学へと受け継がれた。パースにはじまるアメリカのプラグマティズムは、20世紀初頭のシカゴ大学でのジョージ・ハーバート・ミード(1863-1931)の社会的自我のアイデアを発展させた、ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論を経由して、アーヴィング・ゴフマン(1922-1982)のドラマツルギー、アンセルム・ストラウス(1916-1996)のグラウンデッドセオリーへと続き、シュッツの現象学的社会学はアメリカでパーガー＝ルックマンの社会構築主義や、ガーフィンケルのエスノメソドロジー、エスノグラフィーのクリフォード・ギアツにも大きな影響を与えている。

19世紀はダーウィンが『種の起源』(1859)を発表し、また、科学の制度化によって哲学からの分離と技術への応用が盛んになり、「科学の世紀」と称される時代であった。進化論の影響は、マルクスの『資本論』(1867)や、フランスのサン＝シモンやコントの実証主義 *positivisme* にもみることができる。マルクスは資本主義から共産主義への移り変わりを進化のメタファーで捉えていたし、オーギュスト・コント(1798-1857)のいう実証主義は、神学から形而上学への「進化」の先にある立場であった。経験的事実に基づいて正当化された確実な知識を得るためには、人文、社会科学よりは自然科学のほうが有用であり、諸々の学問分野を超えて、統一科学としては数学的な一般法則の発見をこそめざすべきだと主張していた。

質的研究の理論的立場を「ポスト実証主義」と呼ぶ場合がしばしばあるが、この「実証主義」はコントのいう実証主義ではなく、1929年に結成されたウィーン学団(カール・ポパー、ルドルフ・カルナップなど)が唱えた「論理実証主義 *logical positivism*」をさしている(野家、2001)。ウィーン学団の主要メンバーはナチスドイツの台頭ののち、アメリカに亡命し、シカゴ大学に移ったカルナップを中心に「ウィーン＝シカゴ学派」を名乗るようになった。ちなみに、社会学では質的研究の嚆矢とされるトマス・ズナニエツキの「ポーランド農民」(1918-1920)はシカゴ学派第二世代、シンボリック相互作用論のハーバート・ブルーマーは第三世代、ゴフマンやストラウスらは第四世代と呼ばれ、論理実証主義のシカゴ学派とはまったく異なるので注意を要する。

野家(2001)によるとHacking(1981)は、論理実証主義について、コントらの実証主義と同じく統一科学の実現をめざしており、「表層の科学はより深層の科学へ還元可能である。社会学は心理学へ、心理学は生物学へ、生物学は化学へ、化学は物理学へ還元することができる」と考える立場であると述べている。予測の定式化(数式による表現)をめざすなど、重回帰分析を彷彿するところである。この伝に倣えば、より「統一科学」に近いと考えられる数量データによる研究へと質的研究は還元される、つまり、質的研究よりも数量的研究のほうが優れているということである。論理実証主義の枠内に身を置く限り、質的研究の価値は低く見積もられるということになる。

質的研究につながる哲学的理論としてここまでふれられてこなかったのは、構造主義からポスト構造主義に至る流れにである。ウィーン学団の主要メンバーがアメリカに移り住むのと時を同じくして、構造主義人類学の祖、クロード・レヴィストロース(1908-2009)もアメリカに移住している。ニューヨークの高等研究自由学院(ニュースクール)で同僚だったローマン・ヤコブソン(1896-1982)からソシュールの記号論を学び、記号の秩序による言語研究にヒントを得て、ネイティブアメリカンの神話の構造研究に成果を上げた。歴史による意味づけを西欧思想の色眼鏡であるとして否定し、西欧とその植民地の文化は同等であると考えた。文化に隠れた構造は普遍的な構造である(例、婚姻は女性の交換)とするところに、人が共有する言語の規則をパロール、個々人によって異なる部分をラングとするソシュールの記号論が生きている。

ミシェル・フーコー(1926-1984)は、レヴィストロースのいう構造は、空間的な構造であり、時間軸が欠けていることを批判している。フーコーは知の考古学、系譜学と呼ばれる、歴史の言説(ディスクール)を読み解くことによって新たな解釈、新たな知識を得る方法を編み出した。ジャック・デリダ(1930-2004)もレヴィストロース批判によって名を挙げ、デリダとフーコーの考えは、ポスト構造主義と呼ばれるようになった。この二人の共通点は、フーコーが「言説(ディスクール)」デリダが「エクリチュール」と呼んだ、書かれたもの、言われたことなどのテキストへの注目と、テキストを産出する主体についてはカントのというような超越的なカテゴリーを想定しないところである。フーコーの考古学という方法や権力/知としての言説、デリダの脱構築という方法を応用した研究など、近年の質的研究においては度々目にするようになってきている。その多くが社会構築(構成)主義の下位分類となっている(Holstein and Gubrium, 2008)。

## 5. 社会構築(構成)主義に至る諸理論

方法としての質的研究を語ろうとすると、その理論的背景として社会構築主義(または社会構成主義、social constructionism)の名があがる。数量的研究についての実証主義(positivism)の位置を、質的研究については社会構築(構成)主義が占めているようにみえる。

Weinberg(2008)は社会構築(構成)主義につながる哲学的基礎について、基礎づけ主義(foundationalism)、批判理論(critical theory)、解釈学(hermeneutic tradition)に分けて論じている。基礎づけ主義は、知るためにはその基礎(理解の前提となる知識、カテゴリーなど)が必要だとする立場であり、古くはプラトン、デカルト、カントから、ポパー、ウィトゲンシュタイン、クワインを取り上げている。批判理論としては、ヘーゲル、マルクス、フランクフルト学派(アドルノ、ベンヤミン、ホルクハイマーなど)、ハーバマス、フェミニズム、プラグマティズム、解釈学については、ディルタイ、ハイデガーから現象学、ポスト構造主義、ポストモダンまでが含まれている。本稿で紹介してきた質的研究の理論的背景も、大きな流れとしては社会構築(構成)主義につながるものであるといえる(図1)。

B. C.	17世紀	18世紀	19世紀		20世紀		現在	
アリストテレス	デカルト	カント	マルクス	フランクフルト学派 (アドルノ・ホルクハイマー)		ハーバース	批判理論	
				ヘーゲル	フッサール	ハイデガー		ガダマー
	ロック			ハース ジェームズ	シュッツ	コフマン ストラウス ギアツ	バーガー ルックマン ガーフインケル	社会構築主義 (社会構成主義)
					(ノシユール)	ヤコブソン	レヴィナストローヌ	
	ベーコン				サンシモン コント		ポハバー カルナップ	論理実証主義

図1 年代順 主な登場人物と現在言及される哲学的な立場

数量的研究に比べると、質的研究はアリストテレスからフーコーまで、より幅広い哲学的背景をもっている。数量的研究については、それらの名前を見かけることはないといつてよい。数量的研究については、古くはフランシス・ベーコンのいうところの蓋然的推論、つまり統計的推論や論理実証主義といった共通の哲学的背景があり、その枠内にいる限りはそれについて説明する必要がない。質的研究には、ポスト実証主義と総称される、いわば実証主義の反定立としての哲学的背景があり、数量的研究がマジョリティを占める集団の中では、なぜ反定立を採用するかについて説明する必要があるということなのだろう。カントがいうように、定立を採用するのが実践理性にかなった選択であるからとも考えられる。実証主義に基づかない、ということの説明するために、実証主義より以前の考え方や、実証主義以降のさまざまな立場からも、知るということをどのように考えるかについて述べる必要があるということであろうか。質的研究についての哲学についての諸論が言及する範囲が、数量的研究の哲学としての実証主義よりも以前からあるアリストテレスから、実証主義には連なることのない、ポスト構造主義などの哲学的立場までに渡っているのは、つまるところ、実証主義とは異なる立場なのだということを示すために他ならないと考えられる。

扱うデータの種類は異なるが、数量的研究も質的研究も、知識を得る方法であるという点では同等である。得られた知識を後進にわかりやすいように記録して残す、という点でも同等である。問題は、どちらが科学の方法として優れているか、ということではなく、どのようなリサーチクエスチョンに、どちらの方法がふさわしいかである。どちらかの方法を選ばなくてはならないということではない。一つのリサーチクエスチョンについて、異なるデータによって二通り以上の検討を加えることも可能である。知るための方法は唯一ではありえない。数量データでも質的データでも、そのデータが自らのリサーチクエスチョンにどのように答えるのかを慎重に問い、答えが得られない部分については、他のデータによる検討を考慮すべきであろう。質的研究を数量的研究でないもの、社会構築主義をポスト実証主義、つまり実証主義でないものと定義するのであれば、前述のカントの四つの解決策の最後の選択肢——「定立」「反定立」のどちらも承認した上で、それぞれについて承認できる領域を明確にする——によって解決することが、今後の研究の発展のためには必要ではないだろうか。

#### 註

1. ベーコンは劇場のイドラの他には、人が共通してもっている錯覚などの「種族のイドラ」、個人個人の習慣やくせによる「洞窟のイドラ」、伝聞による偏見など言葉によって生じる「市場のイドラ」をあげている。
2. プラトンは人の心にある理解の枠組みのようなものを「イデア」と呼んだ。△を見て三角形だということが理解できるのは、すでに「三角形のイデア」があるからだ、というようなこと。英語のideaはイデアが発祥であるし、フッサールの「イデー」もプラトンのイデアのことをさしている。
3. 大陸合理論は、西洋哲学史において、主にデカルト以降の「イデアはある」とする立場をさす。大陸はヨーロッパ大陸、合理とは「イデア（観念、理念）」に合うという意味。日常使われる「合理」の意味とは異なる。
4. コペルニクスの転回とは、カントがその著『純粹理性批判』において使用した比喩的表現。コペルニクスが地動説を唱えたことから、それまでの常識とは180度異なる角度から捉える、という意味。



参考文献

- Brinkmann, S. (2018). *Philosophies of qualitative research*. Oxford Univ. Press.
- Denzin, N. and Lincoln, Y. S. (2017) *The SAGE handbook of qualitative research* 5<sup>th</sup> edition. SAGE.
- デカルト／野田又夫・井上庄七・水野和久・神野慧一郎 (2001) 『方法序説』中央公論新社.
- フッサール／細谷恒夫・木田元 (1974) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社.
- Holstein, J. A. and Gubrium, J. F. (2008) *Handbook of constructionist research*. Guilford Press.
- Leavy, P. (2014) *The Oxford Handbook of Qualitative Research*. Oxford Univ.Press.
- 野家啓一 (2001) 「[実証主義]の興亡：科学哲学の視点から」『理論と方法』16(1). 3-18.
- Prasad, P. (2005). *Crafting qualitative research: Working in the postpositivist traditions*. M.E. Sharp. = 箕浦康子 (2018) 『質的研究のための理論入門』ナカニシヤ出版.
- 高峰一愚 (1981) 『カント講義』論創社.
- カント／高峰一愚 (1968) 『純粹理性批判』河出書房新社.